

# ウォルター・ペイターの懐疑的精神について

上 村 仁 司

## 序

19世紀イギリスの批評家ウォルター・ペイター (Walter Pater, 1839–1894) は、死の前年である1893年に『プラトンとプラトニズム』(*Plato and Platonism: A Series of Lectures*) を発表した。その第7章「プラトンの学説」(“The Doctrine of Plato”) においてペイターは、「プラトン伝統には哲学史上、相反した二種のものがある」とし、第一の系列として、アリストテレス (Aristotle), スピノザ (Spinoza), ヘーゲル (Hegel), プロクロス (Proclus) からシェリング (Schelling) にいたる全ての新プラトン主義者を挙げ、第二の系列としてキケロ (Cicero), ルキアノス (Lucian), アベラール (Abelard), モンテーニュ (Montaigne) の名を挙げている。ペイターは第一の系列を「抽象的形而上学の体系」(“the abstract, metaphysical systems”) と呼び、第二の系列を「対象のあらゆる側面を概観し、証拠を羅列し、所傾向を確かめ、比較し、考量するが、最終的な判断をくさない (“surveying all sides, arraying evidence, ascertaining, measuring, balancing, tendencies, but ending in suspension of judgment”) 精神を完全に体現した」「懐疑説 (scepticism)」の体系であると述べている (pp.193–4)。ここに、ペイター自身による懐疑主義の定義が見られるとともに、ペイターは自らをプラトンを起源とする懐疑主義的エッセイストの系譜のなかに位置づけていることもわかる。<sup>1)</sup>

本論の目的はこのプラトン哲学の第二系列とされる懐疑的精神がペイターの

著作にどのように変奏され、どのように著作に反映しているかを明らかにすることである。

# 1

この懐疑的精神がいかに一貫してペイターの批評方法の基礎と成りえていたかは、キケロ、ルキアノス、アベラール、モンテーニュあるいはプラトンといった固有名詞を含んだペイター自身の著作にある具体的な記述を見れば明らかである。<sup>2)</sup>

ペイターの主著『ルネサンス』(*The Renaissance: Studies in Art and Poetry*, 1873) 所収の「フランスの古い物語二遍」(Two Early French Stories, 1872) においてペイターはルネサンスという時代の定義をしている。ペイターは、ルネサンスはフランスで始まりフランスで終わったとするが、その始まりを象徴するのがアベラールであると言う。ペイターは、中世のルネサンスで注目されるのは世俗的な詩であり、そのような詩には心の自由が感じられるとし、その「心の自由の表現と、人間的知性ののびやかな働きすなわち知性の自由を結び付けた」のがアベラールであると述べている (pp.3-4)。さらにペイターは、アベラールの当時の宗教との関わりかたをルネサンスの特性と結びつけ、「ルネサンスとは、人間精神が、当時現実に存在していた宗教組織と対立するのではなく、ただそれを超越しそれに依存しない新しい感情・感覚・思想の王国を、さまざまな面で自分のものとした運動なのである」と述べている (pp.6-7)。ペイターはアベラールの宗教的態度から類推してルネサンスの特性を捉えたのである。

「フランスの古い物語二遍」後半において、ペイターはルネサンス期にでてきた「人間の精神と性格の力をより真剣に豊かにはたらかせ」ようという風潮が当時の宗教と必然的に対立したことを述べ、しかし真のルネサンス精神はそのような宗教の側からの「攻撃に防備を固める」必要はなかったと指摘する。「ルネサンスという魔法の国」には「党派がない。排斥もない。「何であれ美し

いものはすべて」人間精神の高揚と美化のために融和している文化を、万物が呼吸している」とペイターは述べる（pp.26-7）。ペイターはこれをアベラールという人物によって象徴させようとしているのである。

ここでもう一度『プラトンとプラトニズム』におけるアベラールへの言及を詳しく見てみよう。『プラトンとプラトニズム』においてアベラールは懐疑説と関連づけられ、次のように記述される。「中世期においてプラトニズムはアベラールの名著『然りと否』において彼自身の確信したスコラ哲学を和らげている」（p.194）。この『然りと否』に関して『岩波 哲学・思想辞典』にはアベラールの「哲学的思索は論理学（弁証学）から神学、倫理学にわたっており、また『然りと否』（*Sic et Non*）に代表される議論の方法は後のいわゆるスコラ的方法の基となった」とある。<sup>3)</sup> 同書の「スコラ哲学」の項には次のようにある。スコラ学的方法とは「哲学、神学、医学、法学の諸問題を相対立する立場から理性が「弁証論的に」探究し、厳密な知識を獲得してゆく方法であった。この方法の特徴は「講読」と「討論」に存した。講読とは権威あるものと認められたテキストを教師が解説あるいは注解することであった。それはある問題に賛成する典拠と反対する典拠の両推論を明確にし、両者を弁証論的に考察することからその問題の真の解答を発見する知的営為であった。そうした講読は必然的に討論をうみ出した。賛成と反対の典拠は組織的に収集された。」そしてアベラールの『然りと否』はその典型例であるとされている。<sup>4)</sup> つまり、ペイターはプラトン哲学が『然りと否』においてアベラールのスコラ的確信を和らげ、修正する役割を果たしていると見るのである。これを「フランスの古い物語二遍」におけるアベラール観と照らしてみると次のようなことが言えるだろう。すなわちプラトン哲学は、アベラールをして宗教との対立を「超越し、依存させなく」させ、宗教からの攻撃に対して必要以上に「防備を固め」なくともよい状態を作りだした。換言すれば、ペイターは、プラトン哲学の第二系列である懐疑説がアベラールに受け継がれ、ルネサンスの起源、発祥に関わり、ルネサンスを特徴づけていると考えていたのである。ペイターはプラトンに対して終生関心を抱きつづけていたことも考慮すると、ヘレニズムの再生という

文脈でルネサンスを捉えた場合、ヘレニズム最大の哲学者プラトンをルネサンスの起源として考えていたのかもしれない。<sup>5)</sup>

## 2

『プラトンとプラトニズム』においてペイターはモンテーニュをルネサンスの代表的懐疑論者であり、同時にプラトン主義者だと指摘し、モンテーニュの『随想録』(*Essays*, 1580)はプラトン化したソクラテスを思い起こさせる方法で他者と対話するいわば「場」であり、モンテーニュはその著作を通じて死者と生者あるいは彼自身と対話すると述べている。(p.194)。ペイターによれば近代は懐疑をもって形而上学と経験科学(empirical science)の双方の主張の行き過ぎを抑え、社会の健全さを保った。近代の懐疑的精神はモンテーニュをして始まり、その後は多くの懐疑主義者が現れたとペイターは指摘する(p.194)。すなわち、プラトンが生んだ懐疑説は中世においてアベラールを介してルネサンスの精神の中核となり、さらにルネサンスの完成者ともいべきモンテーニュによって創始される懐疑的精神が近代社会思想の中核となって引き継がれる、という系譜がペイターが描いていたヨーロッパ思想史の流れであることがわかる。

ペイターの死後に発表された『ガストン・ドゥ・ラトゥール』(*Gaston de Latour: An Unfinished Romance*, 1896)ではソクラテスの「無知の知」を継承したフランス・ルネサンスを代表する作家モンテーニュの「無邪気さ」(innocence)「無知」(ignorance)といった資質が強調される。<sup>6)</sup>だが、『ガストン・ドゥ・ラトゥール』の約30年前に書かれたエッセイ「透明性」(“Diaphaneité”, 1864年にオックスフォードの文芸クラブで発表され、ペイターの死後『雑纂』*Miscellaneous Studies*, 1895, に収録)を見れば、すでにその頃のペイターの理想であったことがわかる。<sup>7)</sup>ペイターは「学者がしばしば形成しようとして失敗しているあの誠実な気質、あの受容性(receptivity)は透明な性格においては知恵(wisdom)によってではなく無垢(innocence)によって生じる」と述べ

ている (p.251)。このように「無知」は「透明な性格」の重要な要素となる。さらに「透明な性格」は「広くも一般的でもない」ものであり、「世界という生の主流に従うのではなく、それを横切るものである」と述べられている (pp.247-8)。富士川義之氏の言葉を借りて換言すれば、「透明な性格」は「世界という生の主流に従って広さと一般性を追求するのではなく、あくまでも自己を狭く限定して特殊でありながら包括的な生である形態を目ざすこと」になるだろう。<sup>8)</sup> たとえば「限定されていてかつ包括的」といった相対立する概念を同時に希求する精神については『プラトンとプラトニズム』においても言及されている。

Reverent and irreverent, reasonable and unreasonable, manly and unmanly, morbid and healthy, guilty and honest, wilful, inevitable — they have been called, indifferently, in an age which thirsts for intellectual security, but cannot make up its mind. (*Plato and Platonism*, pp.194-5)

この一節は先にモンテーニュの解説としてまとめた部分に続くものであり、これがモンテーニュの精神を継承した近代の懐疑主義者の資質であるとペイターは言っている。ペイターは「透明性」を書いた初期の段階ですでに近代的懐疑主義者としての自覚をもっていたことがわかる。そして批評家としてこの懐疑的精神から決して逸脱することはなかった。<sup>9)</sup>

プラトンの懐疑的精神はペイターのデビューエッセイ「コールリッジ論」(“Coleridge”, 1866) にも見られる。「コールリッジ論」において、ペイターはコールリッジとプラトンを比較し、プラトンを真の人文主義的精神を体現する者とし、次のように述べている。

Plato, as we remember him, a true humanist, holds his theories lightly, glances with a somewhat blithe and naive inconsequence from one view to another, not anticipating the burden of importance “views” will one day

have for men. (*Appreciations*, pp.69-70)

ペイターはコールリッジのあまりに生真面目な精神とプラトンの何事にも固執しない、軽快な精神とを比較し、後者を重視する。これは『プラトンとプラトニズム』でペイターがプラトン哲学の第二の系列とした「懷疑説」の変奏と言えるだろう。ペイターはプラトン哲学の中に「対象のあらゆる側面を概観し、証拠を羅列し、所傾向を確かめ、比較し、考量するが、最終的な判断をくたさない」態度が重要な要素であることを認識しているが、その認識はすでに「コールリッジ論」を発表した時期にあったことがわかる。

ペイターは「コールリッジ論」においてこのプラトン哲学の第二系列の懷疑説が後まで受け継がれ、18世紀の精神の中に表れていると見ている。ペイターは18世紀の精神について「抽象的な問題を扱う際の完全な教養を示す印と考えられる無頓着さ (unconcern) が目立たないながらも存在した」(p.69) と述べている。この「無頓着さ」が抽象的問題を扱う際の「心構え」であり、それをコールリッジは理解しなかったというのがペイターの主張である。ペイターは例えば哲学や論理学などに関して過去の事柄にあまり深刻に関わるのは「適切な心的態度」(just mental attitude) ではないと言うのである。では何を「適切な心的態度」であると言うのだろうか。

The humanist, the possessor of that complete culture, does not “weep” over the failure of a “a theory of the quantification of the predicate,” nor “shriek” over the fall of a philosophical formula. A kind of humour is, in truth, one of the conditions of the just mental attitude, in the criticism of by-past stages of thought. (*Appreciations*, p.69)

ペイターはhumourがそれに相当すると言う。<sup>10)</sup> このhumourこそペイターの懷疑的精神の核となる概念であり、「コールリッジ論」の隠れたテーマではないだろうか。

3

次にこの「懐疑的精神」がペイターの著作にどのように反映しているかを見てみよう。もしペイター自身が「最終的な判断を下さない」精神を自らの著作においても実践しているとすれば、ペイターの著作は曖昧な印象を読み手に与えることになりはしないだろうか。事実、ペイターの著作における曖昧な態度は多くの批評家の指摘するところである。例えば、R. V. ジョンソンは、その著『唯美主義』において、「ペイターには、懐疑主義の立場をとりながら、なにかしら、ふつうの人間の認識をこえた精妙な観念的存在をさがし求めるという矛盾した面（“an incongruous hankering for some rarified ideal existence transcending the ordinary human lot”）が明らかに認められる。少なくとも気質的には、かれはプラトン派的な側面をもっていたのである」と述べている。<sup>11)</sup> この文脈ではジョンソンは「懐疑主義」を相対主義の意味で、また「プラトン派的な側面」を絶対主義の意味で理解している。換言すればジョンソンはペイターが相対主義の立場をとりながら、絶対主義の方へ視線が向いていると言っているのである。

キャロリン・ウィリアムスは、ペイターは『ルネサンス』の「結論」において相対主義、主観主義、虚無主義、快楽主義の立場に立っているわけではなく、むしろそれらを否定する立場に立っているという見解を示し、ジョンソンとは反対の見方をしている。つまりウィリアムスはペイターが絶対主義の立場にありながら視線が相対主義の方へ向かっていると言っているのである。ウィリアムスは、ペイターは「結論」において彼の時代の危険な近代思想を完全に吸収しているので、実は彼の真の目的であった近代思想に対する防御の方は見過ごされていると言う。真の目的が見過ごされてしまうのは「結論」が曖昧な態度で書かれているからであり、その「曖昧さ」は「懐疑的精神」に起因すると考えられる。ウィリアムスはペイターが戦おうとしていた哲学のまさにその唱導者として世間から非難されたのは、文学史における一つのアイロニーであると

述べるが、そうしたアイロニーを生じさせたのはペイターの懐疑的精神なのではないだろうか。<sup>12)</sup> ルネ・ウェレックは『近代批評の歴史』において「結論」を評し、「この快樂主義は経験論と感覚主義の一形態である」とし、「万物は変化して過ぎ去り、発展し進化する。ペイターはダーウィンの理論を喜んだ」と述べている。<sup>13)</sup> だが、ペイターはダーウィンの思想を「喜んだ」のではなく単に「吸収した」だけであり、それに対して最終的な判断をくだしてはいない。むしろダーウィンの思想の行き過ぎを和らげることに主眼があったと考えられる。

『岩波 哲学・思想事典』によると、唯美主義のなかで「特に有名なのは19世紀の芸術至上主義の主唱者らに見られるものである。その自覚的表明は、効用と区別された美が芸術の目的であるという、フランス人ゴッティエの『モーパン嬢』[1835]の序文を嚆矢とする。その後フランスのボードレールやイギリスのペイター、オスカー・ワイルドにおいて唯美主義は頂点に達した」とあり、ペイターは唯美主義の代表的作家の一人とされている。<sup>14)</sup> ペイターを有名にした『ルネサンス』の「結論」には、「最も賢明なものは、芸術と歌のうちに過ごす」という一文がある(p.238)。哲学の目的が真理を探究することであるとすれば、まさにここで表されている態度は、真や善に優先する美を信奉するものである。「結論」のペイターはそうした意味で唯美主義の「頂点」に立ったのである。しかし、ペイターの懐疑的精神は唯美主義という立場に固執することを許さなかった。したがってペイターは終始一貫してモラリストであったと言うT.S.エリオットの見方も可能になるのである。エリオットは『エピクロス主義者マリウス』について次のように述べている。「この本の本当の意義は、十九世紀の思想と感受性の歴史にあらわれたある時期の記録としてのものだと私は思う。その時代には思想の崩壊が起こり、芸術や哲学や宗教や倫理や文学の孤立がはじまったが、これを止めるためとにかくこれらを総合してみようとさまざまな途方もない試みが行なわれている。・・・「芸術のための芸術」の実践はフロベールやヘンリ・ジェイムズが熱心に努めたことであって、ペイターはこの人たちといっしょではなく、いくらか地位が下になるとしてもカーライ



ルやラスキンやアーノルドといっしょにされる。」エリオットによれば、ペイターは美を最優先する芸術至上主義者ではなく、社会・文化思想家、あるいは教養主義者の範疇に入る作家ということになる。<sup>15)</sup>

#### 4

では、具体的に曖昧性がどのように実践としての批評の中に表れているかを見てみよう。例として批評家としてのペイターの出発点である「コールリッジ論」を取り上げてみよう。ペイターは、このエッセイにおいてコールリッジは繊細微妙な思想を収めるにはあまりに粗大な形式しかもっていなかったとし、「科学的真理は捉えがたく相対的なもので、微妙な差異に満ちている。だがコールリッジはこれを絶対的方式に当てはめようとした」と述べている (p.72)。さらにペイターは「哲学的批評家は一見直観的な想像力の産物と思われる作品においても、そこにある悟性の力、構成の論理的過程、知性の巧緻な働きといったこれらの価値を認めるだろう」と述べる (p.81)。バックラーはこうした記述からペイターは「近代の懐疑派であり、時代の子であっただけでなく、時代の代弁者でもあった」と述べている。<sup>16)</sup> この場合の「懐疑派」とは「相対主義者」という意味で使われている。バックラーはしたがって「コールリッジ論」のペイターの立場は相対主義であると判断しているのである。

しかし、「コールリッジ論」はペイターがコールリッジに惹かれていることを読み手に感じさせずにはおかない。バックラーもそれを認めている。<sup>17)</sup> 一方、ジョン・ビアーは『ロマン的影響力』において「コールリッジ論」について次のように述べている。「ペイターはコールリッジの絶対の追求を非難しているが、ペイターは自分の内に同様の渴望があることを認識していた。その渴望は「永遠への憧憬」とでも呼べるものである。・・・ペイターはコールリッジの固定した方式の探究を批判したが、ペイター自身も流動する世界のなかに不動性を探し求めていたのである」。<sup>18)</sup> ビアーは、ペイターをコールリッジと同様に絶対主義者だと見ているのである。ペイターは「コールリッジ論」において、

プラトンのイデア説とゲーテの「形象、色彩、情緒の世界のいかなる接触をも無視しなかった」態度を比較し、後者を支持する（p.68）。ゲーテの態度を相対主義と取れば、それはプラトンのイデア説と対立する態度となる。<sup>19)</sup>

ここでもう一度「コールリッジ論」においてプラトンがどのように言及されていたかを確認しておこう。「コールリッジ論」ではプラトンは真の人文主義者と規定され、そして人文主義の本質はhumourにあるとされる。humourとは無頓着とも言える軽々とした態度であらゆる事物を受入れ、しかも固執しない精神の謂である。だとすればゲーテの「いかなるものも受け入れる態度」はプラトンの軽快な精神の継承とも取れる。ペイターは「コールリッジ論」においてプラトンをイデア論、つまり絶対主義哲学の樹立者として論じる一方で、プラトンをhumourを基本とした相対主義的人文主義の源泉であるとも述べている。つまり1866年に書かれた「コールリッジ論」においてすでに『プラトンとプラトニズム』で提示されるプラトン哲学の二つの系列が意識されていたことがわかる。ペイターは「コールリッジ論」において、「抽象的形而上学」の系列をコールリッジによって代表させそれを批判し、「懷疑説」の系列をゲーテによって代表させそれを支持しているのである。「コールリッジ論」では相対主義が支持され、絶対主義が批判されているように見えるが、実はそれはペイターの最終的な判断ではない。ペイターの基本的態度は「最終的な判断をくださない」「なにものも排除しない」精神であるために、相対主義も絶対主義も否定することも肯定することもしない。これが評者によって「コールリッジ論」におけるペイターの態度について見解が分かれる原因であると考えられる。そして最も問題なのは、懷疑的精神は懷疑主義をも懷疑の対象にするということである。つまり、懷疑的精神は懷疑主義を否定も肯定もしないのである。

## 5

ペイターは「コールリッジ論」において「18世紀の教養の完全な態度とする無頓着さ」について語っているが、具体的にどのような作家あるいは思想家を

思い描いているのであろうか。まず、考えられるのはゲーテである。だが、ここであえて18世紀において「無頓着さ」とhumourを備えていた思想家としてシャフツベリー（Anthony Ashley Cooper Shaftesbury, 3rd Earl of, 1671-1713）との関連を以下に考えてみたい。『プラトンとプラトニズム』でプラトン哲学の第二系列として挙げられたキケロ、ルキアノス、モンテーニュといった作家の折衷的、随想的、対話的形式はゲーテよりもむしろシャフツベリーにより明白に継承されていると思われるからである。<sup>20)</sup>

ペイターがシャフツベリーを18世紀の完全な教養を代表する思想家として考えていたかどうかはわからない。ペイターの著作中にシャフツベリーへの言及はないからである。ただ、インマンの調査ではペイターがシャフツベリーの著作を図書館から借りていた記録は残っている。<sup>21)</sup> しかし、それがただちにペイターの著作に影響を与えているということにはならない。だが、これから援用するカッシラー（Ernst Cassirer）のシャフツベリー解釈のなかには、ペイター理解を深化させる洞察がいくつか含まれていると思われるのである。

カッシラーは『英国のプラトン・ルネサンス』第6章「ケンブリッジ学派の終焉と影響、シャフツベリー」においてシャフツベリーを論じている。カッシラーはプラトン哲学の伝統は、イギリスにおいてケンブリッジ学派に継承され、「ケンブリッジ学派を学問上の骨董品として終わらせずに、数世紀にわたってそそり立つ哲学上の一勢力に盛りあげたのは、主にシャフツベリーの功績である」として、ケンブリッジ学派研究の最終章をシャフツベリーについての論考に当てている。<sup>22)</sup> カッシラーは、シャフツベリーをラルフ・カドワース（Ralph Cudworth）、ジョン・スミス（John Smith）、ヘンリー・モア（Henry More）といったケンブリッジ学派と隔てているものは「芸術的雰囲気」であるとし、シャフツベリーは「審美的形式を要求しかつそれに熟達した最初の人」であり、「美は真である」という主張はその逆もまたシャフツベリーにとっては真であると述べている。そしてカッシラーは次のように言う。

宇宙の美しさをかつて感得することもなく、美にたいして熱狂することでも

きない人々の宗教をシャフツベリーは退ける。そして熱狂、靈感の能力にユーモアの能力(“the capacity for humour”)が伴わねばならない。ユーモアとは、魂が美と真理を把握するのにもっとも適した基本的な気分、態度である。この状態におかれたとき、魂に初めて芸術の世界が開かれるばかりか、信仰と知識の問題や宗教と哲学にかんする判断のための適切な立脚点が確保される。<sup>23)</sup>

カッシーラーはさらにこの先で「ユーモア」(“humour”)を「魂の根本的力」とし、同時に「真理と虚偽の客観的な判断基準として認めるのは」「シャフツベリーの世界像におけるもっとも逆説的な特徴である」と述べている。そしてカッシーラーはこの「ユーモア」と「懐疑主義」が密接に関連していることを示唆する。カッシーラーは「シャフツベリーのように、宗教上の誤った説や熱狂さえも暴力的に押さえつけるべきでなく、嘲笑という武器(the weapons of satire)で立ち向かい「嘲弄の試練」(‘test of ridicule’)に曝すべきであるという命題を主張すること」は宗教を愚弄することに他ならないのではないかと述べ、この嘲笑の背後に懐疑的精神を読み取る。英訳で引用すると次のようになる。

Did not the most deliberate urbane scepticism lurk behind this proposal, smilingly overleaping all bounds, disputing and destroying all seriousness in religion? <sup>24)</sup>

シャフツベリーが「ユーモア」を用いて戦ったものは「カルヴィニズムとピューリタニズムの厳格な生真面目さ」であった。<sup>25)</sup> カッシーラーはこの戦いの背後にシャフツベリーの「ユーモア」の本質、すなわち「薄笑いをうかべながらあらゆる境界線を踏み越えるもっとも冷徹で世俗的な懐疑」を見ている。先の「コーリリッジ論」からの引用に見たペイターのhumourと重ねてみると、ペイターがダーウィニズムに代表される経験科学に対して同じ戦法を採用したのではないかと想像することもできよう。引用にある「あらゆる境界」(“all bounds”)

には形而上学と経験科学，すなわち絶対主義と相対主義が含まれ，ペイターはhumourによってそれを越えた位置に自らを置く。ペイターがプラトンに見出した軽快な精神はシャフツベリーにhumourとして継承され，もっとも有効な武器として『熱狂についての書簡』(*Letter concerning Enthusiasm*)や『共通感覚－機知とユーモアの自由についてのエッセイ』(*Essays on the Freedom of Wit and Humour*)において使用された。そしてペイターが「コールリッジ論」で述べている18世紀の教養の完全な態度とする「無頓着さ」もまたこのhumourに由来するのではないだろうか。<sup>26)</sup>

## 6

ペイターの著作は一見して上述のシャフツベリーの的なhumourとはまるで接点がないように見える。物静かで慎重で学究肌の職人的美文家というイメージがペイターにはある。だが，そのような人間が『ルネサンス』の「結論」に示された大胆な思想を持ち得るであろうか。また仮に持ち得たとしても，それを発表するであろうか。ペイターの慎重で生真面目な性格と「結論」のあの大胆な主張の格差はどのように説明されるのでであろうか。それを説明するのはプラトンからペイターが継承したhumourであろう。『ルネサンス』の「結論」の背後にわれわれはペイターが受け継いだシャフツベリーの的なhumourを見るべきであり，それは決して生真面目な性格の産物ではないだろう。ペイターは形而上学と経験科学の行き過ぎを嘲笑をもって咎め，それを中和し，和らげる効果を狙ったのである。ペイターを「美の使徒」あるいは「芸術至上主義者」として捉えるのも一面的であろう。というのは真理や善といった道徳的観念についてもペイターは著作のなかで執拗に論じているからである。例えば『ルネサンス』において取り上げられるレオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロ，ボッティチェリなどは「美」というよりも「真理」の探究者として位置づけられているからである。そして『想像の画像』(*Imaginary Portraits*)『エピクロス主義者マリウス』『ガストン・ドゥ・ラトゥール』の主人公たちもやはり

そろって「真理」の探究者と規定できる。それは人間が「完全な正義や完全な美や完全な人間的行為」を希求しないではいられないことをペイターが認識していることの証左である。<sup>27)</sup> しかし、ペイターが扱う人物はきまって最後に挫折し、真理への探究は、「最終的な判断をくださない精神」が彼らの目的の成就を妨げるかのように、未完のまま放置される。そしておそらくペイター自身の目的であった「最後まで遠慮 (diffidence), 気兼ね (reserve), 躊躇 (scruples), 後思案 (second thoughts) を維持」することと「判断中止の状態の順調な発展と良好な育成」つまり「健全性」を鼓舞することは、「懐疑的精神」が本質的に孕む消極性によってその効果を減じられているのである。<sup>28)</sup>

『エピクロス主義者マリウス』第24章「幻ならぬ会話」(“A Conversation Not Imaginary”)の素材になっているのはルキアノスの対話篇『ヘルモティムス』(*Hermotimus*)である。それは究極的な真理に達することが不可能であることを説いている。ペイターは「幻ならぬ会話」で実際にルキアノスとヘルモティムスがマリウスのいる前で対話をおこなうという工夫を施している。しかし、懐疑的精神は結局懐疑主義自体を懐疑の対象にしてしまうという本質的消極性はルキアノスの人物描写に自ずと表れ、懐疑的精神を完璧に体现するはずのルキアノスを相対化してしまっているのである。作中のルキアノスは、墓碑銘にある哀切な言葉に感動せず、永遠を望む気持ちも消えた優雅な懐疑主義者として設定されている。

It surrounded him, as some are surrounded by a magic ring of fine aristocratic manners, with “a rampart,” through which he himself never broke, nor permitted any thing or person to break upon him. (*Marius the Epicurean*, volume II, p.143)

文頭の‘It’は‘scepticism’を指し、懐疑的精神はここにおいて懐疑的精神自身に向けられているのである。なぜ、ペイターは『エピクロス主義者マリウス』に「幻ならぬ会話」のような章を設けたのであろうか。その答えの鍵は『ルネ

サンス』の「結論」の次の一文にあると思われる。

Experience, already reduced to a group of impressions, is ringed round for each one of us by that thick wall of personality through which no real voice has ever pierced on its way to us, or from us to that which we can only conjecture to be without. (*The Renaissance*, p.235)

この一文は上の『エピクロス主義者マリウス』からの引用と酷似している。『ルネサンス』からの引用の文は受動態で書かれているが、前後の文脈から人間を厚い壁で取り囲んでいる動作主は経験科学と考えられる。ここにあるのは極端な経験科学の必然的帰結なのである。ペイターの懐疑的精神はこの帰結を考察の対象とし、考量はするが最終的な判断はくさない。ペイターはいかなる価値判断もこの帰結に対してしていないのである。したがって肯定も否定もしていない。それにもかかわらず経験科学を肯定する相対主義的唯我論者と見做されたペイターは、1877年の『ルネサンス』第2版で「結論」を全文削除した。その後ペイターは『エピクロス主義者マリウス』の執筆に入り、1885年に出版する。その上でペイターは1888年の『ルネサンス』第3版では、以下のようなコメントをつけて「結論」を再録した。

This brief "Conclusion" was omitted in the second edition of this book, as I conceived it might possibly mislead some of those young men into whose hands it might fall. On the whole, I have thought it best to reprint it here, with some slight changes which bring it closer to my original meaning. I have dealt more fully in *Marius the Epicurean* with the thoughts suggested by it. (*The Renaissance*, p.233)

この引用の最後の部分を見れば、『エピクロス主義者マリウス』と『ルネサンス』の「結論」の関連が明白になる。『エピクロス主義者マリウス』からの

先の引用では「懷疑」が懷疑的精神を体現するルキアノスを取り囲み、彼を外部から遮断し、孤立した存在にしている。つまり、ペイターは、『ルネサンス』の「結論」の文の主語である「経験科学」を「懷疑主義」に置き換えた文章を書いているのである。そして、『エピクロス主義者マリウス』において孤立するのは『ルネサンス』において孤立した「経験」という普遍的な概念ではなく、ルキアノスという懷疑的精神の体現者なのである。ここでのルキアノスはもしかしたらペイター自身を指しているのかもしれない。そうすると、これは自己を対象にしたパロディ的行為であると言えるだろう。その行為の裏には自らの批評方法の基礎である懷疑的精神自体が自らの著作の真の声を曖昧にしてみようことを認識しているペイターのhumourが感じられる。少なくともペイターは「コールリッジ論」からの先の引用の言葉を実践しているのではないだろうか。そこで、ペイターは完全な教養を備えたhumanistの条件について述べていた。ペイターはプラトン哲学からこのhumanistの姿勢を読み取り、それを自らの姿勢として採用すると同時に、それを著作にも反映させていると考えられないだろうか。ペイターの著作の曖昧さはペイターのプラトンの懷疑的精神の中核となるhumourを備えた“humanist”的要素が必然的にもたらすひとつの効果であると言えないだろうか。<sup>29)</sup>

#### テキスト

ペイターの著作のテキストはすべて1910年のマクミラン・ライブラリー版を使用した。引用の後のページ表記はこの版による。本稿中の『ルネサンス』の訳文は別宮貞徳訳に、『エピクロス主義者マリウス』の訳文は工藤好美訳に依る。

#### 註

- 1) F. C. McGrath, *The Sensible Spirit: Walter Pater and the Modernist Paradigm* (Tampa: University of South Florida Press, 1986), p. 48. また *Plato and Platonism* について工藤好美は『ウォールター・ペイター研究』において次のように述べている。「ペイターのように精妙な芸術家の最後の書物が哲学に関するものであったことは、ある人々にとって、奇異に感じられるかもしれない。しかし彼は研究者としての彼の生涯の初めから、形而上学にたいする強い嗜



好をもっていた。・・・そして彼がいま彼の研究の対象として選んだのはプラトン—あらゆる哲学者のなかでおそらくもっとも芸術的な哲学者であるプラトンであり、ペイターが特に力をいれて考察しようとしているのも、プラトンの美的あるいは審美的側面である。」しかしPaterはPlatoを形而上学ではなく懐疑的精神の起源として捉えその意味で常に関心を抱きつづけたのではないだろうか。工藤好美『ウォルター・ペイター研究』南雲堂、1986年、313頁。なお、1870-80年代のイギリスにおけるPlato研究の伝統との関連はIan Smallの*Conditions for Criticism*を参照。Ian Small, *Conditions for Criticism: Authority, Knowledge, and Literature in the Late Nineteenth Century* (Oxford: Clarendon Press, 1991), pp.104-111.

- 2) Samuel Wrightの調査では、Ciceroは主要なところで、*Appreciations*所収の“Style”で4箇所、*Marius the Epicurean*で3箇所、*Plato and Platonism*で2箇所、*Gaston de Latour*で2箇所、*The Renaissance*所収の“Joachim du Bellay”で1箇所言及されている。いずれも簡単な言及であり、詳しい説明はない。しかし、*Plato and Platonism*のこの部分ではCiceroが第二系列の代表者とされている。Samuel Wright, *An Informative Index to the Writings of Walter Pater* (West Cornwall: Locust Hill Press, 1987), p. 93.
- 3) 『岩波 哲学・思想事典』(岩波書店、1998年)、1446頁。
- 4) 同書、871頁。
- 5) *The Renaissance*所収の“Pico della Mirandola”もまた懐疑的精神との関わりにおいて注目すべき一篇である。Paterはこのエッセイで、自分の懐疑的気質の源泉を探究し、Picoを理想の人文主義者と見なしている。Picoは新プラトン主義者であるので、第一系列に属するはずだが、Paterは明らかに第二系列の人文主義者と見做している。ルネサンス哲学を代表するPicoの思想は古代異教世界、ヘレニズムとキリスト教世界の融合を試みたシンクレティズムであり、それは「かつて生ける男女の興味を呼び起こしたものは・・・、その活力をすべて失うことは決してない」(p.49)という態度によって特徴づけられる。そしてその態度の源泉はプラトンであることをペイターは指摘している。
- 6) 例えば*Gaston de Latour*, pp.103-4.
- 7) Thomas Wrightは*The Life of Walter Pater*において、ペイターの処女エッセイ「透明性」に関して次のようにコメントしている。“*Diaphanéité*-or diaphaneity, to spell it the English way-is, of course, the quality of being diaphanous; and he imagined a man who should be as a crystal-who should be, furthermore, absolutely himself....Pater’s own aim in life was

to approach this type, and to a considerable extent he succeeded.”  
Thomas Wright, *The Life of Walter Pater*, vol. I (New York: G. P. Putnam’s  
Sons, London: Everett & Co. 1907), p. 217.

- 8) 富士川義之『ある唯美主義者の肖像－ウォルター・ペイターの世界』(青土社, 1992年), 28頁。
- 9) *The Renaissance* 所収の “Winckelmann” では懐疑的精神の源泉である無垢性について、先行するエッセイ「透明性」での議論を発展させる形で論じている。「ギリシャの彫刻の美は、性の区別のない美である。神々の像には性のしるしが極めて少ない。ここに道徳的な無性がある。それは、自然の無能力の完全体とでも言うようなものだが、それ独特の本当の美と意味をもっているのである」(pp. 220-1)。そしてペイターはゲーテの言葉を引用し、全に生きるとはいかなる意味かと問う。それは「さまざまな形態の天才が与えるものをすべて刈り取るよりも、諸形態それぞれの力を見出すこと」であり「みずからの生を感じることである」とされる (p. 229)。
- 10) humour という語は定義が難しく、どのような訳語をつけても意味が限定されてしまうので、以下 humour のままで記述する。
- 11) R. V. Johnson, *Aestheticism* (London: Methuen & Co, 1969), pp. 76-7. 中沼了訳, 『唯美主義』文学批評ゼミナール 3 (研究社, 昭和46年), 102頁。訳文は中沼訳に依る。
- 12) Carolyn Williams, *Transfigured World: Walter Pater’s Aesthetic Historicism* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1989), pp. 12-3.
- 13) Rene Wellek, *A History of Modern Criticism: 1750-1950* (London: Jonathan Cape, 1966), p. 390. p. 396.
- 14) 『岩波 哲学・思想事典』, 岩波書店, 1998年, 1615頁。
- 15) T. S. Eliot, “Arnold and Pater” (1930), *Selected Essays* (London, Boston: Faber and Faber, 1986), pp. 442-3. 『文芸批評論』(矢本貞幹訳, 岩波文庫, 昭和43年, 161-2頁。訳文は矢本訳に依る。なお、ペイターの主要な著作 *The Renaissance*, *Marius the Epicurean*, *Gaston de Latour*, *Plato and Platonism* の時代設定はいずれも歴史的変動期であり「思想の崩壊」とその再生を扱っていると言える。ある意味では、こうした時代設定はいずれもヴィクトリア朝時代の変奏であり, Pater は想像的・創造的批評によって「総合の試み」を各著作において simulation していると言えるかもしれない。崩壊する自国文化の再生の鍵を過去のモデルに見出そうとする態度は、たとえば *Plato and Platonism* 第1章 “The Doctrine of Motion” の最後でアテネとスパルタにモデ

ルを求めるDanteの姿勢に表れている。そしてPlato自身もアテネの腐敗した社会はスパルタに範を求めることに再生されると考えているのであるとPaterは述べている (p.26)。Eliotからの引用の前半と合わせて考えると、PaterはDanteやPlatoのこうした姿勢を自らのものと重ね合わせていたのではないかと思われる。この問題についてはBucklerがコメントしているので参照されたし。

William.E.Buckler, *Walter Pater: The Critic as Artist of Ideas* (New York and London: New York University Press, 1987), p.312.

- 16) William. E. Buckler, *Ibid.*, p.130.
- 17) William. E. Buckler, *Ibid.*, p.7, p.130.
- 18) John Beer, *Romantic Influences: Contemporary-Victorian-Modern* (Houndmills and London: The Macmillan Press, 1993), p.173.
- 19) Angus Fletcherは*Colors of the Mind*において、「コールリッジ論」の読者はPaterの議論の進め方から「コールリッジが相対主義の主たる創始者であろうとわれわれ」に予想させるが、その予想をPaterは裏切ると述べている。つまりFletcherは、PaterがColeridgeに対して抱く親近感がそのような予想をさせると言っているのではないだろうか。Pater が記述しているのは「真に科学的な観察の繊細さ」であり、「われわれは、きわめて精密に純化された「印象主義」の教義に耳を傾けているのである」とFletcherは述べ、PaterはColeridgeを相対主義と戦った人と定義したが、もしColeridge の『備忘録』を読んだら、違ったことを言うだろうと指摘している。Fletcherはさらに「しかし真に重要なのは、ペイターが先駆者をその中に置いた絶対的精神と相対的精神の葛藤という枠組みである」と述べている。Angus Fletcher, *Colors of the Mind* (Harvard University Press, 1991), 『思考の図像学—文学・表象・イメージ』（伊藤誓訳、法政大学出版局、1997年）243-4頁。訳文は伊藤訳に依る。
- 20) Bell-Villada は、芸術至上主義の代名詞になっているWildeの思想はRuskin, Pater, Gautier, Baudelaireの思想の寄せ集めであり、さらに遡ればVictor Cousinを経てKantとShaftesburyに行き着くと述べている。さらにBell-VilladaはKantの観念論の伝統がColeridgeとPaterを通じて影響力を持つに至ったと付言している。Gene H. Bell-Villada, *Art for Art's Sake and Literary Life: How Politics and Markets Helped Shape the Ideology & Culture of Aestheticism 1790-1990* (Lincoln & London: University of Nebraska Press, 1996), pp.1-2. Linda DowlingもEdmund Burkeを経由したPaterとShaftesburyの関連を指摘している。Linda Dowling, *The Vulgarization of Art: The Victorians and Aesthetic Democracy* (Charlottesville and

London: University of Virginia, 1996), p.2. また, Basil Willey は, R.L. Brett を援用しながら Shaftesbury を John Locke の経験哲学に反対の立場をとった思想家として規定し, Shaftesbury は Coleridge の先駆的存在であったことを主張する。Shaftesbury は Locke が重視しなかった詩人や芸術家の価値を十分に認め, とりわけその想像力を高く評価した。なぜならば Shaftesbury にとって「想像力は神の心のうちの永遠の創造行為の, 有限な心による模倣である」だったからである。さらに Willey は次のように言う。「この考えは, 世界を震動する原子の構造物とみなし, 精神を連想の法則によって束ねられた, 感官による印象の集合とみなし, 想像力を記憶に蓄えられた切り抜きはめ絵の切片から模様をつくる能力とみる傾向にあった時代にあっては, 大胆な主張であった。」Basil Willey, *The English Moralists* (London: Chatto & Windus, 1964), p.226. 『イギリス精神の源流』(樋口欣三訳, 創元社, 1980年) 259頁。訳文は樋口訳に依る。これを Bell-Villada の系譜と重ね合わせてみると, Shaftesbury から Coleridge を経て Pater にいたる一つの線がイギリス唯美主義の流れのなかに引かれるのではないかという推測が成り立つ。またその系譜が Pico を含むことは容易に予想できよう。

- 21) Billie Andrew Inman, *Walter Pater's Reading: A Bibliography of His Library Borrowings and Literary References, 1858-1873* (New York & London: Garland Publishing, Inc, 1981), p.213, p.220.
- 22) Cassirer は *The Philosophy of the Enlightenment* 第7章 “Fundamental Problems of Aesthetics” において, も Shaftesbury を扱い, Kant から Goethe そして Shaftesbury へと繋がる線を想定している。Cassirer によれば Shaftesbury は「過去の作家と直接対話する。理論によって美学を学んだのではない」とされる。また, Shaftesbury にとって「美学は理論ではなく, 個人的な生き方の問題であった」とも言う。さらに, Shaftesbury は「美学を芸術作品として考察したのではなく, 真の人間形成とは何か, 個人の内的, 精神的宇宙を支配する法則とは何か, という問いに答えるのが目的であった」と Cassirer は理解している。Ernst Cassirer, *The Philosophy of the Enlightenment*, translated by Fritz C. A. Koelin and James P. Pettegrove (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1951, 1979), p.313. 『啓蒙主義の哲学』(中野好之訳, 紀伊國屋書店, 1962, 1997年), 389頁。また, Cassirer は *Platonic Renaissance in England* において次のようにも述べている。「18世紀のドイツ美学がとりあげ, 引き続いてメンデルスゾーンが発展させ, カントが体系的に解明し, 強化した「無関心的快感」の概念は, シャフツベリーに由来する。この概念

を歴史的にさかのぼってその起源にいたろうとすれば、ここでもまたプラトンに注意を向けなくてはならない。」Cassirer, *Platonic Renaissance in England*, translated by James P. Pettegrove (New York: Gordian Press, 1970), p. 186. 『英国のプラトン・ルネサンス—ケンブリッジ学派の思想潮流』(花田圭介監修, 三井礼子訳, 工作社, 1993年), 175-6頁。訳文は三井訳に依る。こうしたCassirerのShaftesburyに関する記述は、たとえば*Plato and Platonism* 第7章“The Doctrine of Plato”にある「抽象的真理を論ずる場合においては重要なのは思惟された事柄より思惟した人物である」(pp.154-5)という考え方や、あるいは同書第4章“Plato and Socrates”にある、ソクラテスを、宇宙やあるいは自然界の存在を問うという虚しい努力はやめて目を個々の人間の内側に向けよ、と警告した哲学者として捉えるソクラテス観に通底するものがあるように思われる。

- 23) Cassirer, *Platonic Renaissance in England*, pp.166-8. 『英国のプラトン・ルネサンス』160-1頁。
- 24) *Ibid.*, pp.168-9.
- 25) *Ibid.*, p.169.
- 26) この“humour”は*Plato and Platonism*において懐疑的精神の代表の一人として挙げられたLucianと結びつく。Lucianは*Marius the Epicurean* 第4章“The Tree of Knowledge”において、Flavianによってその著作をMariusに紹介される。「これらの作品はほの暗い場所にむけられた知的光にあふれていて、その光はすくなくとも人の心の晴れわたった季節には、これまでおそらく祈るのがつねであった場所で人を笑わせることができた。」(p.51) これはまたGaston de Latourの第5章“Suspended Judgment”の中の“I love a gay and civil philosophy. There is nothing more cheerful than wisdom. : I had like to have said more wanton.” (p.110) というMontaigne自身によって語られる言葉と呼応している。
- 27) “Plato may yet promote in us what we call “ideals”—the aspiration towards a more perfect Justice, amore perfect Beauty, physical and intellectual, a more perfect condition of human affairs, than any one has ever yet seen;” *Plato and Platonism*, p.195. Paterはイデア説を否定している訳ではなく、むしろ人間の本質的欲求として理解している。
- 28) *Plato and Platonism*, p.196.
- 29) W. Shuterは“*Plato and Platonism* repeatedly employs foundations that a reader familiar with the rest of Pater’s work will recognize as of earlier

origin. By thus detaching them from their context in his earlier writings, Pater indicates that his last book is also to be read as a revision or recontextualization of his own earlier texts.”と述べ、この一節に続けて具体的に *Plato and Platonism* と “Coleridge’s Writing” からの文章を比較し、後期の著作が初期の著作の “a reshuffled text” となっていることを論証している。William F. Shuter, *Rereading Walter Pater: Cambridge Studies in Nineteenth-Century Literature and Culture* (Cambridge University Press, 1997), p.115.